

会 議 名	令和7年度第2回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事 務 局	市民部 コミュニティ文化課（はけの森美術館）		
開 催 日 時	令和7年8月29日（金）18時30分～20時00分		
開 催 場 所	市立はけの森美術館 多目的講義室		
出 席 委 員	鉄矢悦朗会長 山村仁志委員 原田隆司委員 畑島一代委員 平田勇治委員 中川法子委員		
欠 席 委 員	なし		
事 務 局 員	コミュニティ文化課文化推進係 津端 佐原 同 はけの森美術館学芸員 中村、津村 同 はけの森美術館学芸アシスタント 永井 同 はけの森美術館学芸顧問 河合		
傍 聴 の 可 否	可		
傍聴不可・一部不可 の場合は、その理由	—	傍聴者数	0人
会 議 次 第	(1) 展覧会「中村研一とモダニズム（第一期）」の観覧 (2) 事業実施報告 (3) 今後の予定について (4) その他		
会 議 要 旨	別紙のとおり		
提 出 資 料	資料1 開催中の展覧会・教育普及事業等 資料2 日程表		

【鉄矢会長】 皆様、こんばんは。本日は御多忙の中、お集まりいただき、誠にありがとうございます。

ただいまより令和7年度第2回小金井市はけの森美術館運営協議会を開会いたします。

最初に、資料の確認を事務局よりお願いいたします。

【事務局】 事務局です。

資料のほう、次第のほか、資料の1、資料2、また会議録のほうを机上に置かせていただいております。大丈夫でしょうか。

では、開会に先立ちまして、事務局より人事について報告させていただきます。

不在になっておりました学芸員なんですけれども、1名、7月1日付で採用いたしました。津村さんになります。一言お願いします。

【津村学芸員】 津村久美と申します。大学は美術専攻だったんですけれども、大学を出てすぐは広告とか編集のほうにいまして、美術のほうになったのは15年ぐらい前になります。ちょっと年齢はいつているんですけれども、経験としてはその程度なんですけれども、区の美術館と大学美術館で学芸員をさせていただいていました。どうぞよろしくお願いいたします。

【事務局】 また、5月より学芸アシスタントとして永井さんを採用しております。一言お願いします。

【事務局】 5月からこちらでお世話になっております。学芸アシスタントの永井友梨と申します。6年間ベルギー、2年間フランスに留学しておりまして、専攻はベルギー芸術、19世紀、20世紀のベルギーの芸術の中でも、特にジェームズ・アンソールについて研究しております。

美術館で働くのは初めてなんですけれど、学芸員業務の補助として、こちらでお世話になっておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

【事務局】 事務局からは以上です。

【鉄矢会長】 よろしくをお願いいたします。委員を代表しまして、私のほうからよろしく申し上げますとさせていただきます。

では、次第の(2)、事業実施報告について事務局から説明をお願いします。

【中村学芸員】 事業実施報告に関しましては、学芸員の中村より報告させていただきます。

お手元の資料1及びスケジュール記載のございます資料2のほうに沿って報告させてい

たきます。

まず、開催中の展覧会ですけれども、こちらは既に御覧いただいたかと思えますけれども、ただいま特別展としまして「中村研一生誕130周年記念特別展 中村研一とモダニズム」の一期としまして、「モダニズム 出会いと展開」という展示を、こちら7月30日からスタートしております。こちらの展示ですけれども、概要に書きましたとおり中村研一が今年生誕130年になるということで、当館の所蔵作品が中心ではあるんですけれども、ちょっとモダニズムの時代を生きた画家としての中村研一の画業を二期制で顧みようということで、その一期として、比較的早い時期のフランス留学中の作品ですとか、それから特に結婚直後ぐらいの富子夫人を描いた作品というのを中心に構成しようということで、今回の企画をしております。

こちら先ほど申しましたように、ほとんど当館の所蔵作品が中心ではあるんですけれども、「北京官話」に描かれたものと同型のデッキチェアというのが横浜の氷川丸にあることが分かりまして、こちらのほうを借用するということと、それから、せっかく「北京官話」に描かれている現物につながるものを展示するということで、それに合わせて、「北京官話」に描かれているのと同時代のチャイナドレスということで、こちらも横浜のユーラシア文化館に、チャイナドレスが非常にまとまったよいコレクションがあるということで、そちらのほうから1940年代から50年代にかけてのチャイナドレスで、「北京官話」に描かれているような非常にヨーロッパ的な要素というのを意識したモダンなものの現物をお借りしまして、「北京官話」の隣に展示するということを行っております。

7月30日から開始しましたので、そろそろ1か月ということになるところですけれども、入館者に関しましては、下に示しましたように、本日時点で計270人ということで、やや、ここはいつもの展示に比べますと、出足が伸び悩んでいるというところがございます。これに関しましては、もうこれははっきりと、かなり暑いというところが影響していることはちょっと明らかかなという感じでして、そもそもこのはけの道を歩いている人が全然いないんですね。市のほうからも高温注意報で、炎天下、用もないのに歩かないようにというようなことも案内が出ておりますので、やっぱりそういうところで言いますと、ここに来るまでの身体的な負担というところがどうしてもかかってしまうというところは、ちょっと入館者数に影響してきているかなというところがございます。

それ以外にも、ちょっとお盆の期間などもありましたので、今回の展示に関しましては、ちょっとある意味仕方がないかなというところもあるんですけれども、これから9月に入

ってきて、できれば早いうちに暑さのピークを越して、少し、皆さん歩き回るのにリスクを感じないような気候になるといいなというふうに期待しておるところでございます。ただ、ちょっと受付の皆さんも、なかなかそういう形で鑑賞に来てくれる人がいないというのを気にかけてくれておりまして、学芸アシスタントの永井さんと受付の皆さんでいろいろそこに対する対応策なんかも話し合ってくださったということで、ちょっと雨の日にプレゼント、来館者に対して、雨の日に来てくれた人に対してプレゼントをあげるという雨の日プレゼントというのを過去にやっていたんですけれども、そちらを復活させてみようとか、そういうことをちょっといろいろアイデアを出し合ってくださっているところでございます。ということで、まだあと1か月ぐらいは続くんですけれども、これからちょっと先、少し持ち直すといいなというふうに思っております。

関連企画としましては、こちら資料1の1ページ目の下のところからちょっと関連企画が記載してございますけれども、実施したものとしては、こちらに、まず関連企画の1として挙げております「段ボールであそぼう！」というのが、これちょうど昨日行われました。

「こごうちぶんこ ことりのへや」という、そちらのほうに小河内さんという方のちょっと簡単な御案内が出ている額がございますけれども、地域の文庫として長く活動されている「こごうちぶんこ ことりのへや」というグループのほうにちょっとここに来ていただいて、絵本の読み聞かせと、それから今回は段ボールを使った工作というのを組み合わせたワークショップをやってもらうということで、こちら、当日参加オーケーで先着順という形で昨日行ったんですけれども、夏休みの最後の時期だったので、平日の開催ではあったんですけれども、9組15人ということで結構盛況なイベントになったというものでございます。子供が15人、中に乳児が1含まれているんですけれども、来てくれて、ここで結構熱心に段ボールを使った工作のほうに取り組んでくれましたということで、こちらが開催された関連企画になります。

2のほうは、ちょっと網かけしておりますのは、こちらはちょっと来月に開催予定ということで、今回の開催中の展覧会の中には含んでいるんですけれども、まだ開催はこれからのワークショップでございます。

洋画家竹内功氏に習う「水彩絵具『にじみ』『ぼかし』の世界」ということで、こちらは、どちらかというと比較的年齢としては小学生以上ということで、子供向けというよりは大人の方も含めたワークショップというような形で想定しているもので、絵の具の画

材そのものの魅力というものに着目して、竹内功氏にいろいろなワークショップ、実際に物を使って、絵の具の効果を楽しんでもみたりするということも含めてやってもらうということで予定しております。こちらは9月27日の午前の会と午後の会ということで予定しておりますけれども、申込み先着順で既にどちらも満席になっているというものですけれども、非常に早いペースで埋まりましたので、結構気にかけてくださっている方が多いのかなというところです。

ギャラリートークに関しましては、2枚目のほうの冒頭のところにあるんですけども、1回目はこちら既に開催しまして、7月30日に始まってから、割とすぐ8月2日の土曜日に行いました。これは、結構始まってすぐに行ったので、ここに延べ7人というふうに書いてあるんですけども、ちょっとこれ延べ人数で、一度離れていた人が戻って参加したりとかというところも含めてのところなので、実際に参加した人数としては、もうちょっと少ないかなというようなところがございます。ちょっと写真を見返しますと、確実に参加しているなという方が2人いらっちゃって、あと、ちょっと気になってちらちら参加してくださっている方が二、三人かなという、そういう感じの状況でした。

もう一回、ギャラリートークのほうを予定しております、こちらの2回目のギャラリートークのほうは9月13日を予定しております。9月に入って、暑さの峠も越して、もうちょっと増えているといいなというふうに思っております。

開催中の展覧会とそれに関わるギャラリートークなどの関連企画の報告としましては、以上となります。

続きまして、教育普及事業として開催したものの報告に移らせていただきます。

鑑賞教室に関しましては、これから開催する学校が大部分ではあるんですけども、先行して5月16日に南小学校の4クラスが、こちらに来館してくれました。5月16日でしたので、前の展示の「ナカムラケンイチのシン人物画鑑賞」のほうに来てくれたということになります。この日は、ちょうど天気もよかったので、展覧会だけでなく、緑地のほうも非常に気候のいい時期でしたので、緑地のほうにも出て、池の様子を見てみたりとか、ちょうど湧き水が結構出ている時期だったので、子供たちが何か池の中をのぞき込んで「何かいる」とか、「ザリガニを見つけた」とかというので結構盛り上がっている子なんかもいましたけれども、展示の鑑賞とそれから緑地の見学ということも併せて行いました。

教育普及事業の鑑賞教室として開催したのはこちらの1校で、これから行う学校が大部

分ですので、こちらは以上となります。

その次の3の外部企画による展示というのは、こちらは、当館ではなくて東京学芸大学の附属図書館1階のロビー本棚におきまして、当館とかの、今回行っております「中村研一とモダニズム」の展示と関連した展示ということで、特別本棚の設置というのが、こちらは8月25日から9月25日までの1か月間の予定でスタートしたということです。こちらは、博物館と連携する学びのプロセスデザインプロジェクトというものの一環ということで、学芸大の附属図書館で行っている学生向けというふうになるのかもしれませんが、今回の展示に関わるモダニズムについての書籍というのを展示しているということで、こちらのプロジェクトの代表が鉄矢悦朗先生ということで、運営協議会の会長の鉄矢先生のほうでプロジェクトの代表を務められていらっしゃいます。ということで、開催中の展覧会、教育普及事業等の報告に関しましては、以上となります。

【鉄矢会長】 何か質問、御意見等ありましたらよろしくお願いします。

【原田委員】 原田ですが、質問です。

「北京官話」に描かれたものと同型のデッキチェアって、これはどうして氷川丸にあるというのが分かったんですか。

【中村学芸員】 これは、偶然なんですけれども、実は、ほかの作品のことを調べているときに、氷川丸の船内の設備ですとかそういったものがどうなっているかということちょっと図録で調べておりましたら、秩父宮が氷川丸に乗られたときにデッキチェアに座ったということで、そのデッキチェアの写真が出ていたんですね。そのときに、どうも覚えがあるなと思ひまして、「北京官話」と比べてみたらよく似ているということで、ちょっと「北京官話」のものとかかなり近いんじゃないかと思ったんですけれども、ちょっと氷川丸に今回の展示を開催するに当たって問合せをしてみましたら、その図録が出た時点では、実は氷川丸にデッキチェアは1脚しか残っていなくて、氷川丸で展示用に使っているのはほかに貸出しとかはしていないということだったんですけど、ついこの間、倉庫から2脚デッキチェアが出てきて、そちらは特に使っていないので貸出し可能であるということで、タイミングが非常によかったんですけれども、そちらを貸してもらえることになりました。

【原田委員】 なるほどね。あの展示がすごく印象に残りましてね、富子さんって何回も絵で見ているから、もう既に他人ではないような気になっているんですが、ああいうふうに立体的に展示されると、何かそこから富子さんが現れてくるんじゃないかという、絵

をそのようにして見たのは初めてですね、ドレスと椅子が。ああいう展示ってほかでもやっているんですか、立体展示って。

【中村学芸員】 例えば、ゴッホのアトリエの再現ですとか、そういった形でまとまってる残っているものをまとめて持ってくるですとか、そういったものというはあるかと思うんですけども、今回ののは、何かそういった意味では非常に偶然が重なって、ちょっとやれそうな気がするということで、各場所にちょっと打診したら、ちょうどオーケーをいただきまして。

実は、そもそも、あの椅子がデッキチェアだということに気づいたきっかけが、たしかこの運営協議会で、鉄矢会長があれをデッキチェアと呼んだということから、ああ、そういえば、あれはデッキチェアだったのかということに気づいたという経緯がございます。

【原田委員】 その一言がなければ。

確かに、「北京官話」じゃなくて、もう一つのデッキチェアへ座っている絵の後ろの脚を見ると全く同じですもんね。だから、きっと間違いないということだと思います。

【中村学芸員】 ただ、ちょっと氷川丸のほうでも、あちらはそういった形で使っていて、古くなったら保存するというよりかは、もうそのまま処分するというような形で1脚しか残っていないと思っていたのも、やっぱり使って古くなってみんな処分してしまっただろうということで、残っていないと思っていたということなんですね。なので、ちょっとデッキチェアとして形は明らかに同型ではあるんですけども、氷川丸自身のほうでも、あのデッキチェアがどこに頼まれて、どのぐらい作られて、どのぐらい流通していたのかとか、そういうところに関しては、実際、ちょっと残っていなくて分からないということだったので。

【原田委員】 倉庫にしまってあるんだったら、1脚、寄贈していただけるといいですね。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

そのほか、何かございますでしょうか。

【山村委員】 いいですか、山村です。

感想なんですけど、展覧会を見て、チラシとかポスターのデザインもすごくよくて、また、章解説のパネルもすごくデザインがよくて読みやすかったなというふうに思います。あと、今おっしゃったとおり、立体展示、衣装の展示なんかも作品を鑑賞するのにすごく役に立ったなと思います。「モダニズム」と言っているのは、そういう服だとか、デッキ

チェアがモダンなのか、そうじゃないのか分からないんですけど、そういうアトリエだとかモチーフのそういう新しさを指しているんだなというのは何となく分かるんですが、絵画のモダニズムという言葉もあったりとか、建築のほうでも使ったりとか、非常に幅広い言葉なので、もう少しチラシとか最初の解説に、「ここで言うモダニズムとは」と一言あると、もっと分かりよかったなというふうに思います。それが1点。

あと、たまたまなんでしょうけど、東京国立近代美術館で今やっている戦争の展覧会で、中村研一の「コタ・バル」とか何点か出ていて、ああやって見ると、御覧になった方いらっしゃるかもしれませんが、やっぱり藤田嗣治と中村研一は絵がうまいなという。特に大きな画面の作品になると、全然力量が違うということが、そういうのがよく分かります。しかし、チラシとか作っていないんです。東近美のほうはね。だから連携が難しいんですけども、何かそういう関連する展覧会への御案内があるといいなというふうに思いました。これは要望です。

以上です。

【中村学芸員】 ありがとうございます。

二期のほうで、ちょっと戦争に関わるような時期というところと、モダニズムと戦争とこのをどう関係として考えていくかというところにちょっと触れていきたいというふうに思っておりまして、東京国立近代美術館のあの展示もそういった意味では大いに参考にさせていただこうと思っています。

【山村委員】 そうだ、1つ忘れていた。一期、二期の区別がいまいち明確じゃないと思いました。だから、出会いと展開とは奥さんのことを言っているんだとも思うんですけども、その辺がもうちょっと明確だといいなと思います。二期のほうの展示で、それがどんなふうに一期、二期が違っているのか、解説が欲しい。年代だけじゃないんですよね、ただの。

【中村学芸員】 そうですね。

【山村委員】 年代が、割と今回も45年とか50年、戦後の部分も出ているので、何かその辺のことももうちょっと明確にさせていただくとありがたいなと思いました。

【中村学芸員】 分かりました。ありがとうございます。

【鉄矢会長】 感想なんですけれども、すみません、学芸大のほうで、学芸員の中村先生に本を選んでいただいて、うちのほうの予算で本が買えていますので、私自身が、このタイトルとこの内容、内容は今日初めて見たんですけど、タイトルを聞いて、私、建築な

ので、建築のモダニズムから見ると意味が分からないというか、非常に捉えにくい、絵画のモダニズムって何を意味するのか。

【山村委員】 これは絵画のモダニズムじゃないですよ。

【鉄矢会長】 ないんですよ。

【原田委員】 違うんですね、でも、それは最初からね、そんな話があった。

【鉄矢会長】 だから、その辺のモダニズムの時代とか、その辺を知りたくて、学芸大学のほうでも勝手にというか本を並べてみたら、人が選んだモダニズムの並べた本というのも非常に面白くて、貸出し禁止になっているので立ち読みしかできないですけど、ぜひお立ち寄りください。チラシも一応、美術館のほうには送ったので、チラシを送ったんじゃないくて、チラシのデータを送ったというところで、御活用ください。

今、博物館、美術館と連携する大学というものを去年が八王子の夢美術館でやったので、今年のはけの森とやって、来年、府中さんはどうなんですかね。何かそうやって。

【山村委員】 連携は徹底的にやりましょう

【鉄矢会長】 質疑応答、こんな感じでよろしいでしょうか。

ほかにありますか。

では、(3) 今後の予定について、事務局から説明をお願いいたします。

【中村学芸員】 今後の展覧会、教育普及事業等につきまして、こちら、引き続き中村より報告させていただきます。

展覧会ですけれども、この後の予定としましては、10月31日の金曜日から12月21日までということで、今回の中村研一とモダニズムの二期ということを予定しております。

「中村研一とモダニズム 二期モダニズム、変容」という副題を予定しておりまして、こちら、下の概要のところに記載しておりますように1930年代から40年代の作品を中心とした展示構成ということで、現在、考えておるところでございます。ここの時期ということで、やはりそういう意味でいいますと、先ほども申し上げましたように、中村研一とモダニズムとの関係性を変容させていくという1つの要素としまして、戦争という要素をいかに考えるのかということをして二期の中では大きなテーマとしたいというふうに考えておりまして、特に、「艦隊入港」という土佐の宿毛湾に日本海軍の大艦隊が入っていくというそういう様子を描いた絵が、これ、昨年度、当館に新規で寄贈されました。1937年につくられた、そうした意味では非常にシンボリックな作品なんですけれども、そ

らに描かれている艦隊とは何か、そもそもテーマとしてそういうものを描くということに対してどういう意味を求めていたのかということも含めてちょっと紹介ということで、新規の寄贈作品の初公開ということも併せて行いたいというふうに思っております。

それ以外の作品につきましては、中村研一が戦争期に描いたものを中心にしつつも、1つテーマとしましては、モダニズムというのがいかに終わるのか、あるいは終わらないのかということをちょっと考えていきたいと思っております、戦後の作品にそうしたものがどう写し取られていくのかということもテーマにしたいと思っておりますので、1945年以降の作品というものも、こちらの二期の中では1つのトピックとして取り上げたいと思っております。

今ちょうどその調整を進めておるところなんですけれども、芸大美術館から、そうした意味では中村研一の戦後の富子夫人を描いたものとしては代表作と言っていいと思いますけれども、「マラヤの装い」という作品が芸大美術館にございまして、そちらのほうをちょっと借用させていただいて、こちらの展示のほうで紹介できないかなというふうに思っております。こちらの「マラヤの装い」に関しましては、ちょっと簡単なリーフレットを作成しまして、今後の二期の展示に合わせて、そちらのリーフレットを来館者に渡すというような形にしたいと思っております。

関連企画としましては、ちょっとまだ調整中のところが多くありますけれども、ギャラリートークとそれから3枚目に入りまして、「日本画材を使ったワークショップ」というのと、「ねんどを使ったワークショップ」ということで、こちら、ちょっとまだ調整しているところがいろいろありますけれども、予定しております。

2の教育普及事業に関しましては、こちらは、まず鑑賞教室が9月以降、大分佳境を迎えるといえますか、8校が、この二期の展示のところまでで来館予定です。9月26日の第二小学校が一期のところですが、それ以外の7校は第二期のところ、11月から12月の木曜日と金曜日は毎週どこかの学校が来ているみたいな、そんな感じでやって来る予定です。

あと、こちらはちょっと市内の市立中学校のほうからの打診ということで、まだちょっと正式な受入れというわけではないんですけれども、11月26日から28日の3日間で、市内の市立中学校の職場体験、こちら、ちょっとまだ各学校のほうで職場体験に行きたい場所というのを調査中ということですので、美術館に来たいという中学生がいないと受入れというか、そもそもここでの実施がなくなっちゃうんですけれども、職場体験というこ

とで26日から28日に受入れ可能ですということでお伝えしておりますので、希望の生徒がいたらこちらで体験してもらおうということになろうかと思います。

なお、3のその他というところ、「はけを歩くウォーキングイベント」ということで、こちら、原田委員に講師というか、こちらのツアーというようなところの部分をお願いするような形で、現在、コミュニティ文化課のほうで調整しているというものになりますけれども、11月下旬から12月上旬にこのかいわいの外を歩いて美術館までやってくるというような形で、現在調整されているとのこと。これは昨年、富永親徳展をやったときに、ギャラリートークの日にこのイベントを組み合わせ、ちょうどギャラリートークが始まる時間帯ぐらいにこちらに到着するようにしたところ、ギャラリートークにそのまま流れで参加してくださった方が結構いたということで、ちょっと今年もそれを期待しまして、次の第二期のギャラリートークの日に重ねて行うことで、また参加者が見込めるのではないかなというふうに期待しているものになります。

ということで、これから開催する展覧会と鑑賞教室等に関しましては、以上となります。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

では、質問、御意見等ありましたらよろしくお願いします。

【原田委員】 質問です。原田です。

ウォーキングイベントを今年も担当させていただきます。それで、こちらとしての希望は11月22日なんです、この日でも大丈夫ですか、ギャラリートーク。

【中村学芸員】 恐らく大丈夫だと思います。

【原田委員】 去年よりも少しコースを短くして、西側を歩いて戻ってくるようにします。それで、14時のギャラリートークには全員が参加できるようにしたいと思いますので、よろしくお願いします。

【鉄矢会長】 そのほかございますでしょうか。

【平田委員】 教育委員会の平田です。職場体験とか本当にありがとうございます。

昨年度、この鑑賞教室のところで調整でちょっと苦労されたというのを伺ったのを記憶しているんですが、今年、何か特に課題とかがなかったかなと。大丈夫でしたか。

【中村学芸員】 現在、鑑賞教室に関しましては、学芸アシスタントの永井さんが中心となっていろいろ手配などして下さっているんですけども、ただ、やはり、今年も日程調整と、それから各学校のクラスの鑑賞時間の確保ですとか、そういうところは、これは正直に言いますとやっぱり結構苦労しているところでございます。

こちらとしても、バスを手配するということをしないと来られない学校に関しては、まずバス契約というところをクリアしないと、実際の行程とかというところに進めないわけですけども、ただ学校としては、年間の行事予定というのが、これはもう4月の頭には決まっていなくて困るということで、そこでの部分で、やはりどうしてもこちらの手順と学校側の手順というところでのタイミングのアンマッチが起きているということがネックになってはいるんですね。バスの契約とか、美術館の職員の体制が整っていないと鑑賞教室を受け入れるというのはやはりちょっと難しいわけで、「ここからここまでのいつでもいいですよ」というふうにはちょっと言えないところがあります。そういう部分で、じゃ、さりとてどうすればいいのか分からないという、そういうふうな状態になっているところですね。

【平田委員】 分かりました。まず2点あって、1点目のバス契約については、もう、今、バスを確保するのが非常に大変で、指導室も4月だとバス確保は非常に厳しいかなというのが、今、そういう時代背景もあるかなと。

2つ目のほうの意義とか価値とかというところは、この最初の頃をすごく覚えているので、本当は最初の頃は、学芸員と図工の先生と一緒に組んで、何かこういう鑑賞の授業をやろうという新しい取組というところで研究した研究校からスタートして、あのときの図工の先生とかは非常に、もう10年以上前の話なんですけど、意義を感じて、すごく前向きに開発していったんですね。ただし、もうその当時の教員はほぼ全員いないから、そのつくった頃の思いとか、何かそういったものがちょっと薄れてしまったというところで、今もしかしたら、学校の先生たちとか、何のためにやるのかを見失っている感はちょっと感じているかな、それが先ほどのずれというところに今生じてきているかな。

あと時代の変化で、やっぱりこの10年変わった中で、学習指導要領がどんどん変わっていく中、今はいわゆる探究型学習というところにシフトして行って、何か子供が主体的に活動できるようにというところで、かなり授業のスタイルとかもどんどん今組み直しているというのがあります。ですので、バスの確保の難しさと、あとはもう一度問い直すというんですかね、いきなりこれをぱちっと線引きするのはあれかもしれないんですが、何か新しい形の探究型学習として、地域の美術館を活用して新しい授業のスタイルをつくらうみたいな話で、もう一度研究をやってもいいかなというのは、今ちょっと思いながら聞いているところです。じゃないと、多分、お互いが心をすり減らしてやるよりも、ちょっと建設的に、今の時代に合わせてもう一度問い直しませんかというので。また、いわゆる

最初の頃の、ある研究校と一緒に新しいやり方を研究しましょうみたいに二、三年間置くというのでもいいのかなというのが、ちょっと今思いました。これはちょっと意見ですけれども、また検討していただいて、お互いがウィン・ウィンの関係になればいいなと思っていますので、よろしくお願いします。

以上です。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

そのほかございますでしょうか。

【山村委員】 ちょっともう一回、山村です。

すみません、さっきの話に戻るんですけど、モダニズムの説明を今聞いていくと、何か、近代に生きる実感というか、中村研一が近代を生きる実感か、出会いみたいなものが戦争を境に変わったか、変わらないかというようなことが問題になっているように今の話は受け取れるんですけど、それでいいんですかね。

【中村学芸員】 少なくとも今回の展示におけるモダニズムとしては、それが1つの軸になると。

【山村委員】 1つの軸というのは、ほかの軸もあるんですか。

【中村学芸員】 そうですね。そこで言いますと、例えば、モチーフとしての近代性というものをどう考えるのかということと言うと、特に艦船というモチーフにおける鉄であるとか、そうしたもので構成された直線的な近代的なものが、海という自然環境の上に浮いているというものに対して、すごくやっぱり近代的なモチーフとしての魅力というものを中村研一が感じていたということは1つあるかと思うんですね。ただ、やっぱりそういうものを繰り返し描くということの中で、どうしてもやっぱり艦船というものが軍艦というものに具体的なものとして落とし込まれていくときに、じゃ、その意味として載ってくるものは何なのかということ、やっぱりどうしても戦争に関わる具体的な出来事であるということが1つのポイントになってくるのかなと思うんです。

それから、モダニズムというものを、ちょっと終焉的なテーマになりますけれども、実は、中村研一の中国の訪問時のスケッチの中に、雲崗石窟を描いたものというのが複数枚ありまして、雲崗石窟に行って、その様子を1つの東洋美術の理想的なものが残っている様子として描くということが、これ1940年くらいに近代洋画家たちの中でちょっとしたブームになっていることを考えて、今まで中村研一に関しては特に言及されていないですけれども、やっぱりそういう大陸というものに対する興味というふうに乗っかっていく

という部分もあるんだろうと思うんですね。そういったところも含めてちょっと紹介していければなというふうに思っております。

【山村委員】 何かすごくいろんな要素があって、いろんな広い意味で言っているということですね。

【中村学芸員】 そうですね。

【山村委員】 分かりました。あと「マラヤの装い」と「北京官話」とは、時代がどれぐらい違うの。

【中村学芸員】 「マラヤの装い」が1946年の制作なので。

【鉄矢会長】 だから、もう、日展になってからですよ。

【山村委員】 ああ、そうか。

【中村学芸員】 6年後ですね。

【山村委員】 40年と46年のその6年間の違い。何か私の印象だとあんまり違うない気がするんだけど、違うんだ。

【中村学芸員】 と私自身は考えている。大きな違いとしましては、バックが代々木から小金井に変わったというのはあるんですけど。ただ、やっぱりそういう意味でいいますと、ある意味40年の「北京官話」はチャイナドレスを描くというブームに乗っかっているところはあるんですよね。ただ、46年に関しては、そういう民族服女性を描くというブームはある意味過ぎ去っていたはずで。

【山村委員】 でも、何かさっきちょっと東南アジア風の服だよな。

【中村学芸員】 なのにしつこく「マラヤの装い」というタイトルをつけて、民族服女性としての妻を描くということをしたのは、何かちょっとやっぱり本人にとっての意味というのがあったんじゃないかなと思っています。

【山村委員】 以上です。いきなり個人的な関心で申し訳ない。

【鉄矢会長】 いえ、学芸員のこだわりが聞こえるなら、いいことですので。解像度の高い人の話を聞くのと解像度の低いほうから聞くと、何のことだろうと思いつつも、でもちょっとだけ自分も影響を受けるのでいいと思います。

その他、ございますでしょうか。

鉄矢から提案というわけではないですけど、つぶやきぐらいなんですけど、今度、デフリンピックとかやったり、東京国際ろう映画祭とかいうのもやっぱりやっているのを見ると、ギャラリートークに手話が入っていくというのも、こういう小さい美術館だからでき

るんじゃないかなと思って。少ない人数のギャラリートークの中で手話があって、それこそ手話を中心とした人たちが絵を鑑賞するような場面とかが、ちょっと話題つくれそうかなという気がしました。

東京国際ろう映画祭は、私、行ったことあるんですけど、ちょっとショックだったんですよ。全員が手話できる人の中で、手話できない人が自分でマイナーな世界になって、映画を見ていて、みんな笑っても俺は笑えないと。なので、私は字幕を見て笑うという、ずれるわけで、全部遅れてくるというのとか、何かそういう違うシーンを経験したから、多分そういう人たちも絵を見て、解像度の高い会話に関わるともっと面白そうな気がしたものですから、小さい美術館だからできることというのをやっぱり忘れないようにしないとと思っています。

その他ございますでしょうか。よろしいですか。

【畑島委員】 今の鉄矢会長に付け足して、手話の方のギャラリートークがあったんですけども、ちょっと前に読んだ本で、目が見えない方が鑑賞するという、白鳥さんという目が見えない方が美術を見に行くというお話なんですけれども、それは、見える人が絵を白鳥さんという人に解説していくという、そのことによって鑑賞が膨らんでいくというお話だったんですけれども、そういったことももし可能なら、小さな美術館ならではのことができれば、本当に素晴らしいんじゃないかなというふうには思います。

【河合顧問】 決して小さくはなかったんですけども、東京都美術館がそれをやっていたんですよ。彼が来る前ですけどね。先駆的ではあったんですけども、ある種、障がいがある方という、そういう枠の曜日を決めたんですよ。というのは、都美術館の場合、結構大きな展覧会が多いものですから、平日でも車椅子の方とかはちょっと大変で、あと心臓の悪い方なんかは、酸素ボンベの方もちょっとしんどいということがあって、ひとつそういう枠を決めようじゃないかと。だからって、元気で車椅子で平日に来られたって構わないけど、休館日の月曜日に、1回は必ず大きな展覧会のときにやるよというふうに決めたんですね。そのときに最初にボランティアとして、組織があってやってくれた方たち、つまり白鳥さんは直接じゃなかったんですけども、その方たちが言葉による解説という形から始めたんです。それで普及というとおかしいんですけども、各企業の方なんかも協賛のほうで、目が見えない人のための言葉だったらば、自分たちがつくった、製紙会社なんかが紙で凹凸をつくる、そこから皮膚感覚で読み取ることだってできるんじゃないかなというのでやってくださって、かれこれ十何年続いたと思うんですけども、リニューアルに

当たって、ちょっとまた方針が変わったようですけども、そういう形でやっているところが幾つかあると思います。割と先駆的なのは世田谷だったと思いますけどね。ただ、大々的に、新聞とか何かにも話題になったのは、都美術館のときですね。

【山村委員】 1990年代後半から始まった障がい者特別鑑賞会ですね。

【河合顧問】 そう、エジプト展あたりからなんだけどね。結局、正直な話、障がい者の方というと最初に思い浮かべたのが、目が見えない人に、いわゆる健常者の立場で何ができるんだろうという、当時はね。せいぜい皮膚感覚で何かに触ってもらうとか、実際に、かつては、東京都の盲学校の生徒に来てもらって、彫刻なんかを触ってもらうとか。後々、笑い話になっちゃうんですが、猫の彫刻が朝倉文夫なんかにあります。形を触ってもらったと。でも、触った子供が「これは猫じゃない」と言う。僕らはびっくりしたと。何かというと、もわもわじゃないのと、一番はひげなんです。ひげがぴーんとしているでしょう、その触感があるらしいんですね。だから、見ているといっても、やっぱり違う見方をしていたという。今、ちょっと言ったのは全然違うことの、話題違うんですけども、そういう形でノウハウはある程度みんなまだ今もあると思います。

ただ、ここで実際に、実は東京都の、彼なんかも育ててきたほうの1人でしょうけども、とびラーという、いろんなコミュニケーションを一般の人と図っていくという、そこでの研修でやって、3年ぐらいたってOBになった人たちが自分たちで組織した。この美術館に来て、鑑賞教室みたいのを開いたりというのもしてはいるんです。ただ、それが毎回、ルールでやりましょうまでは行っていないんですけど、あることはあります。

【山村委員】 今年、特にデフリンピックが開催されます。だから東京都も力を入れていて、今、東京都美術館の受付の横に手話ができる人が対応するという形になっていますから、その手のことを物すごく手厚くやっていますよね。ただ、正直、そんなに毎日はいないんです。

【河合顧問】 そうですね、東京都の庭園美術館も必ずトークのときには手話がありますというのは、備えているようにしていますけどね。確かになかなか、例えばここだったら、ギャラリートーク10人、当日来て、それも完全に手話があるからと目指して来てくれる人が、何人いるかというのちょっとまだ分からない感じです。

【山村委員】 非常に少ないです。

【河合顧問】 なかなかその辺は。

【山村委員】 彫刻に触るプログラムも、日本彫刻会と協働してやっているものと、独

自にやっているものがあるんですけど、やっぱり直接特別支援学校に出向いて、こういうことをやりますからというふうにしてお誘いする。ちゃんと、最寄りの駅からどう来るだとか、そういうところまでケアしないとなかなか実現しない。

【河合顧問】 今、大分よくなって、とにかく車椅子に関してはバリアフリー化がほぼできましたけども、あと交通手段にしても、バスなんかがリフトあったりとかしますけど、なかなか学校としてまとまってというと、逆に結構しんどいですね。来るのは、外にというのは。

ちょっとプラスアルファで違うことを言っちゃいましたけど、一応、その程度は、受皿としてはもう認識していますし、実際にこちらから積極的じゃないんですけども、来て、高齢者の方たち対応のレクチャーの会なんかをやってはおります。ここには入ってきませんけども、主催じゃなかったものですから。

【鉄矢会長】 ちょっとうちの学生も知らないんですけどね、特別支援の学生がどれだけ手話ができるのかとか、分かっていない、自分が分かっていないのは恥ずかしいんですけど、でも、何か小金井市の中にも少しそういう人がいるよというのが分かるだけでも、いずれの未来をもうちょっと何かいい方向にやったりするのかなと思うので、薄く覚えていて、ちょっとどこかでチャンスがあったらやっていただければと思う感じです。

【山村委員】 社会全体で合理的な配慮がなされるようにならないと、一部でやっても難しいですね、やっぱりね。駅とか、鉄道とか、その間の道だとか、助ける人は絶対に要りますよ。

【鉄矢会長】 よろしいですか、そのほか。大丈夫ですか。

では、(4) その他です。

なければ、次回日程。

【事務局】 次回の日程なんですけれども、秋の展示が10月末から12月21日ということですので、できましたら11月にどこかで行えるといいのかなと思っております。曜日なんですけれども、月、火がちょっと休館日でして、もしできれば、水、木、金の中だと金曜日がいいのかなとは思っているんですけども、11月の金曜日でどこか御都合のつく日はございますでしょうか。

【鉄矢会長】 そうすると、14日、いかがでしょう。

よろしいですか。奇数だから議会とか大丈夫ですか。

【事務局】 大丈夫です。

【鉄矢会長】 大丈夫ですか。

14日金曜日、18時半から。

【事務局】 18時半ですね。この日はちょうど東小学校が5クラス、鑑賞教室をしているので、ちょっとここら辺、どよんとしているかもしれませんが、皆さん出勤してそろってはおりますので、よいかなと思います。

【鉄矢会長】 では、11月14日18時30分から、はけの森美術館運営協議会、第3回ですね、開催したいと思います。

そのほか、何か言い残したこと、学芸員の方でこれやりたいとか、こんなことを考えているとかあったら。

では、なければ、以上ではけの森美術館運営協議会を終了します。

お疲れさまでした。ありがとうございました。

—— 了 ——